



大学から社会全体へと広げる、

現在の道に進んだ理由は何ですか？

安木さん:高校生の授業で生物を学び、病気のメカニズムについて興味を持ったからです。総合生命科学部では、生物の体について細胞・分子レベルの実験ができると知り受験を決めました。研究室配属の際には、瀬尾先生がキラキラと目を輝かせてご自身の研究内容についてお話しされるのを聞き、「私も先生のように研究したい」と思い現在の所属に進みました。

近藤さん:私は高校時代、生物の授業を取っていなかったのですが、テレビなどでがんについて知り、もっと知りたいと感じたことがきっかけですね。入学後にがんに関係のある研究室に訪問して話を聞き、さらに興味が深まりました。

吉田さん:学部から院に進む際には就職も視野に入れていたのですが、やはりこれまでの研究を形に残したいという思いが強く、博士課程まで進むことに決めました。研究テーマに恵まれたこともあり、やりがいを感じていたことが大きかったですね。

瀬尾先生:総合生命科学部では、3年生で研究室に所属します。自分の研究テーマを持つようになり、学会などで専門の方からコメントをもらうなど、研究が深まっていくとよりやりがいを感じられると思います。専門の方との交流があるのは、モチベーションを高めるという意味でも効果的ですね。みなさんは研究をしていてどうですか？

松島さん:なかなか思った通りの結果が出ないこともあります。期待通りの結果が得られた時はとても嬉しいです。

木田さん:結果が出るのが一番嬉しいですね。あと、分からないところを研究室のみんなや先生と話し合いなが

ら検証していくのが面白いです。

近藤さん:研究室は少人数制なので、先生方と学生の距離が近いところが大きな魅力だと思います。

瀬尾先生:実験結果は正直なので、何度も繰り返し挑戦することで、確実に自分の成長を感じられるんです。また、本学は京都という学問の地にあり、学内外に多くの研究者が集まっています。研究テーマや進度に応じて、必要な情報や協力者をすぐに得ることができるのは研究者や学生にとって非常に役立つと思いますよ。

みなさん仕事はずっと続けたいとお考えのようですが、女性の働き方についてご自身の考えをお聞かせください。

吉田さん:結婚や出産を迎えても、仕事は続けていきたいですね。もちろん子どもが幼いうちはそばについてあげたいですが、将来かかる費用のことも考えると私も働かなくては、と。私は仕事をすることで生き生きと過ごせると思うので、子どものためでもあり、自分のためでもあるんです。女性が働き続けるための制度を作るだけでなく、その制度を利用できる雰囲気、理解が職場に浸透することが必要だと思います。

木田さん:制度としては、仕事に復帰する際のフォローアップだけでなく、休職中の情報共有もできる仕組みがあるといいと思います。やはり休職中は孤独感がありますし、仕事や職場



生命科学研究所
1年次
松島 章子



生命科学研究所
2年次
近藤 真菜美



工学研究科
博士後期課程
3年次
吉田 亜佑美



総合生命科学部
生命システム学科
4年次
安木 実悠



総合生命科学部
生命システム学科
4年次
木田 朱音



総合生命科学部
教授
瀬尾 美鈴

研究室紹介

女性が輝くための環境づくり。

の情報が入ってくるだけでも、復帰後すぐに仕事を始められるようになるのではないかと。

安木さん:私は子どもとのコミュニケーションを大事にしたいので、会社の中に保育所があるといいなと思います。休み時間に会いに行くことができれば、女性も安心して仕事ができますよね。また、女性対象のものだけでなく男性にも時短制度などがあつたりすると、家事の分担ができますし、子どももお父さんとコミュニケーションを深められるのではないのでしょうか。

瀬尾先生:みなさんが言うように、男性へのフォローが結果として女性へのフォローにもつながるんですね。家族のために働いてくれるお父さんにも、家族と触れ合う時間をしっかりとっていただけるよう互いに支え合える社会になってほしいと思います。本学でこれから充実させていきたいのは、ライフイベント(出産・育児・介護など)期にある女性研究者の研究継続を支援するための柔軟な勤務体制の確立です。労働時間の短縮や授業負担の軽減、在宅勤務の検討などを行うことで、女性研究者の職場復帰支援に加え、職場としても女性研究者の能力を有効に活用できると期待されています。男性への育児休暇取得制度も推進していきたいですね。

研究を志す理系女子“リケジョ”たちへメッセージをお願いします。

松島さん:理系に進もうとする女子学生は周りでも少数派で、私も高校生のころは進路に迷いました。悩んだ末に理系の道を選び、これまで研究を続けてきましたが、研究の存在が大学生活にやりがいを与えてくれていると思います。将来は、研究を通して培ったこと・学んだことを活かして社会に役

立てたいと思うようになりました。未来の理系女子のみなさんにも、まずは興味のあることを見つけて、自分の可能性を広げていってほしいです。

吉田さん:女性研究者を取り巻く環境はまだ万全とは言えませんが、研究を志す女性が増えることで考え方や視点の幅が広がり、科学の発展にも社会の発展にも多様性が生まれるのではないかと思います。今回のような取り組みが浸透していくことで、未来の理系女子の選択肢が広がるといいですね。

木田さん:研究を行うことに、男女の差はないんですね。特に私たちの分野では、生体の謎を追求することで人類の役に立つヒントやきっかけを見つけられるかも、というワクワク感があります。研究をする楽しさをぜひ感じてもらいたいですね。

瀬尾先生:彼女たちをはじめ、先輩の女性研究者や協力してくださる男性研究者の方々が、理系女子のみなさんの未来を切り開いてくださっています。女性が自分の描く将来像に向かって踏み出すことができ、充実した人生を送ることができるように、ダイバーシティ推進室は今後も社会への啓発を進めていきますので、学生のみなさんにも、希望する分野へ恐れずに挑戦していってほしいと思います。

